

## 岡田武彦著 『宋明哲学序説』

中川, 嘉彦  
福岡県立浮羽高等学校

<https://doi.org/10.15017/18052>

---

出版情報：中国哲学論集. 4, pp.64-69, 1978-10-01. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

岡田武彦著『宋明哲学序説』

中 川 嘉 彦

中国の精神史上、ルネッサンスとも呼ばれる宋代の思想は、漢唐の訓詁学に対する反動として起こり、それはまた時代の要請に応じて明代思想へと変貌していった。本書は七百余年に及ぶ宋明時代の学術思想を、豊富な資料を駆使して、明晰な文体でわかり易く書かれた思想概説書である。また宋明思想に関する著者の数多い過去の論文の総括書であり、長年にわたる研究成果の粹の集大成でもある。それ故入門者から専門家まで、幅広い読者層の要望に応ずることの出来る内容の書でもある。平易でありながら同時に高い水準を保持しているのが本書の生命ではなからうか。

先秦の儒教や仏老を昇華止揚して興った宋明の思想は、仏老は勿論のこと、先儒の思想もよく理解出来ない筆者には、実に難解で特にその用語や複雑多岐にわたる思想家の系列等は、何度読んでも理解出来ず、その為一般の宋明時代の思想書には何となく親しみがわかず、一種のアレルギー的なものを持っていたが、本書はこの点を見事に解消してくれた。いわば筆者にとって本書は、宋明思想に関する福音の書とも言うべきものとなった。以下本書の構成に従って、各章の内容の紹介と、論究の特色及び問題点等について卑見を述べてみたい。

「第一章 宋明時代精神の概観」は本章の序論にもあたる一章で、歴史的あるいは社会的な背景を論じられつつ、宋代から明代に至る時代精神を的確に述べられている。その時代精神の流れを要約すると、唐代の反動批判型として生まれた宋代精神は内観的知思的であり、それが庶民的な元代精神を経て明代に至ると、内観的抒情的になっていったとされている。また共に内観的ではあるが知思的と抒情的との違いがあり、それは当然のことながら、宋明両時代のそれぞれの内外の環境によって生まれた民族性の表象でもあったと主張されており、この観点が本書全体の基調と

なっている。

「第二章 陶磁器の精神」は、一、陶磁器と時代精神、二、唐三彩と唐代精神、三、宋磁と宋代精神、四、元磁と元代精神、五、明磁と明代精神、の五節から成っている。音楽がその時代の政治情勢や人心の動向を反映するように、陶磁器もまたその当時の民族性や精神文化を知る有力な手掛りとなる。朱子が二元的思惟構造を説き、王陽明が致良知を掲げて一元的思惟構造を有する唯心的思想を説いているのも、理智的知思的な宋代精神と、抒情的流動的な明代精神が背景にあったからであり、そういう時代精神は当時の陶芸等によく反映されていると指摘される。例えば、豊満華麗な外観的情緒的な唐三彩は、外観的情緒的な唐代精神の表われであり、宋の白磁や青白磁にみられる「無文の文」といふべき理知的な感じのものには、宋代人の内観的知思的な時代精神がよくうかがえ、華麗濃艶な万暦赤絵には自我の強調、人間の欲望の謳歌を唱えた明代精神が如実に反映されているのであるとされる。この章は美術書からの引用も多く、思想と陶磁器との結びつきを考証され詳述された一章で、序文にも指摘されているように、陶芸等により我々はその時代精神を正確に、ある意味ではまた十全に把握出来るものであるという著者の学問研究の思考基底が強調された章である。もともとこの思考法は、「宋代思想の象徴として宋の青白磁をあげ、明代思想の象徴として色彩豊かな陶器をあげ、動と静という対照を見事にとらえたのは楠本自身であった」（「陽明学入門」四六一頁）という山下龍二氏の評があるように、著者の思師楠本正継博士の思考法であり、それを著者は豊富な資料と見事な論理の展開で祖述し発展させたものといえよう。

「第三章 宋明学の精神」は、一、内観的精神、二、格物論とその背景、三、簡素の精神、四、古拙、五、藏の精神、の五節からなっている。ここでは、最初に内観的精神の概念規定を「内観とは物の本質、即ち理を観ることであるが、そこには見るものと見られるものとの一体が要求される。いわゆる主客融合による観理であり、心と理が渾然融積することである。」とされている。「鶴林玉露」に記されている、「尽日春を尋ねて春を見ず」にはじまる尼悟道の詩には、この内観の精神がよく表出されており、それはまた「宋代人が外観の空しさを知って自ら反省し、結局自己証悟によらねばならぬことを象徴的に示したものであり、具体面では、徽宗の「桃鳩図」にみられるように、描かれた対象は簡素でもそこに盛られた精神は詩情に溢れるものとなった。二節以下はこの内観的精神が、具体的に

思想や芸術にかかわる例証を明快に述べられている。中でも「三、簡素の精神」中の水墨画がよく宋代人の時代精神を表わしている論は、本書の圧巻とでもいえる部分であろう。以下少し本文から抜粋してみると、「水墨画とは……線と明暗（濃淡）を本にした絵画」であり、「外華を去って内実、繁縟を去って簡素を宗」とした。「したがって水墨画は物象の形似だけを描くのではなく、その精神意向を描かんとするものである。それは物象の姿態や形態を重んずる態度ではなく、それを存在せしめてい精神や生命を重んずる態度である。」「宋代人が（このような）水墨画を画道の第一義としたのは、外観の世界よりもその奥にある内観の世界、即ち現象界よりも本体界の表現に心を傾けたからである。」

簡素の精神、古拙、藏の精神はそれぞれ内観的精神を形成する要因でもある。拙の思想が老荘にその源を発するように、簡素も藏も道家の思想に通じるものである。それが儒教的なものに変形していく過程を、具体的に言えば内観的知思的な時代精神が要求された根源を今少し詳述して欲しかった。

「第四章 経学における新古典主義と自由主義」は、一、漢唐の経学、二、新古典主義、三、自由主義、の三節から成る。この章では漢唐の経学（訓詁学）が、宋明時代にどういう形で受け入れられ、それが宋明理学の展開にどのようにかわり合っていたかについて述べられている。今その結論としては、宋代では批判精神として受容し、明代では自由精神として儒教の蘊を啓いてこれを発揚したと要約できよう。

「第五章 宋明の実学」は、一、儒家と異学異端、二、道家と虚実の思想、三、仏家と虚無思想、四、宋明理学と実の思想、の四節から成っている。宋代の理学家は、伝統的な儒教の実に対する自覚と道徳的意識を基調として、道家の玄理、仏家の心性を超越して新儒学を創造したが、それは要するに漢以来の虚の思想に対する反動と批判から来たものであった。「此（儒）は実にして彼（仏）は虚」と言って実を掲げて出発した宋儒も、朱陸に至ると、自らその中に新たな虚実を内包していることに気づかざるを得なかった。そして朱陸は互に自らを実とし、他を虚として争った。これはいわゆる「朱陸同異論」の源流であり、宋学自体が逢着せざるを得ない宿命でもあった。

「第六章 宋学の精神——唯理的思想」は、一、周程の思想、二、邵張の思想、三、程門とその後継者の思想、四、湖南学派の思想、五、朱子の父と師の思想、六、朱子の思想、七、朱子の講友の思想、附録、事功学派の精神、八、

宋末朱子学派の思想、九、元代朱子学派の思想、一〇、明代朱子学派の思想、の十節から成る。この章は「朱子学大系巻一」に大部分は集約されているが、その本をなすのは、著者の長年に及ぶ宋代思想家に対する緻密な研究論文である。その研究成果の粹をここに要約されたもので、宋学開祖の周濂溪から、明代朱子学派の思想に至るまでの多数の思想家を網羅した、宋明時代朱子学派の思想概説史である。中でも宋代理学の基礎を築いた二程子や、その講友張横渠の思想は、従来難解な解説書が多いが、その点本書は実に明快な論旨である。但附録の「事功学派の精神」は一節を設けて独立させられた方がよかつたのではないだろうか。

「第七章 明学の精神——唯心的思想」は、一、陸学の先駆、二、陸象山の思想、三、陸門の思想、四、朱陸同異論、五、明初の心学、六、王陽明の思想、七、現成派の思想、八、帰寂派の思想、九、修証派の思想、一〇、劉念台の思想、の十節から成る。前第六章と並んで時代思想の解説としては、本章の中心をなす章である。あるいは先に刊行された「王陽明と明末の儒教」（明德出版社、昭和四十八年発行）の序文に詳細に記されているように、著者にとっては前六章以上に蘊蓄を傾けられた一章であろう。ただ惜しまれることは、紙数の都合上前記の著書の内容を三分の一程度に要約し、その精随だけを述べられている為、精密広博な解説が省かれ、その点の迫力が欠けることである。陽明の思想を中心として、その先駆となった陸象山と象山門下の思想、及び共に理学を旨としながら、二元的、唯理的、分析的、帰納的、主知的な朱子と、一元的、唯心的、総合的、演繹的、直覚的な象山の思想の相異に触れ、陽明門下を現成派、帰寂派、修証派の三派に分けて論旨明快な好論である。陽明門下の三派の分類も著者をもって嚆矢とするようである。

「第八章 反宋明学の精神——唯気的思想」は、一、唯気論の源流、二、王浚川の思想、三、呉蘇原の思想、四、郝楚望の思想、の四節から成る。この章も前述の「王陽明と明末の儒学」の第八章「批判派と復古派」の要約で、王浚川・呉蘇原・郝楚望について極めて簡潔に述べられている。特に著者が跋文で、「末尾に唯気的思想を述べた一章を入れた。これは恐らく従来の宋明哲学書にはないものと思われるが、この章を設けたのは、唯気的思想が清の思想やわが国の古学派の思想の先駆的役割を果していることを明かにしておきたいためである。」とあるように、「反宋明学の精神」という一大体系の下に構想され書き進められている論文の一部である。因に著者が最近発表された「戴震と日

本古学派の思想——唯氣論と理学批判論の展開——もその一部をなすものである。從來あまりなされてない「日本の古学派の思想と、明末の批判派・復古派の思想」との密接な関連を更に説明されることを是非お願いしたい。

以上各章にわたってその内容の紹介と、部分的な所感を述べてきたが、先ず全体的な構想の配慮の周到さに感心させられる。「解説に長短不揃いのところが生じたことをおわびしておきたい。」（跋文）という著者の懸念は不要で、杞憂にすぎないと思われる程すんなりと読み進んでいくことが出来る。それよりむしろ変化に富んだ不揃いの解説の点が、本書をしてユニークなものにしているような感じさえ与える。前述した通り思想の解説の点では、第六章・七章が中心をなす部分で、分量の点でも全体の半分程を占めるが、第一章で宋明両代の思想の根幹ともいふべきものを、はっきりと「内觀的精神」と規定し、これを受けて、第二章では陶芸でもって内觀的精神の概念の深さ、あるいは大枠とでもいふべきものを示唆し、三章ではそれを簡素、古拙、藏とかに分析し、四章ではそういう時代精神を背景にして経学が蘇生していく過程を述べ、七章・八章と進んでいく。いわば演繹的な手法とでもいふべきものが本書の構想になっているのではなからうか。

次に本書が哲学書でもあるにも拘らず、多くの絵画や陶磁器の図録を挿入され、第二章で陶磁器の精神を力説された理由は、序文にも触れられているように、個人の思想を単なる思想としてではなく、「その思想家の人物全体をそのままに直接に感得しようとする」著者の思想研究の基本的な姿勢を如実に示したものであろう。事象を渾然一体のものとしてつかもとうとする点、程明道にも似たものを著者の人間像に見るのは筆者の独断であらうか。

最後に本書に対する総括的感想を一、二述べてみたい。著者は宋明学の精神を内觀的精神と規定され、この精神の体得には、身心内に沈潜して静慮深思する内面的工夫が必要であるとされたが、このことは、物のみが主として追求され、ともすれば心が忘れ去られている現代文明に対する鋭い示唆になりうるものであろう。次に著者がよく言われる言葉として、筆者の記憶に残っているのであるが、人間とは何か、自己とは何かということをも単に理屈の上で論述することよりも、自己を立派にする（宋明学という自己完成）ことが、根本的命題であるとする著者独自の体認の学に思い至る時、本書は読者にとってより身近かで切実なものとなりうると思うのは、筆者の、いつわらざる読後感である。

〔付記〕

冒頭に述べたように、本書は、著者の長年にわたる宋明思想研究の総仕上げの書であり、ぼう大な資料と研究成果を最小限に圧縮されて書かれたものにほかならない。この点いみじくも本書に説かれた、宋代人が複雑で深遠な精神を表現する為に簡素を旨とした「蔵の精神」が具現されたものとなった。表面に現われた部分でさえ十分に理解出来ない筆者にとって、その背後に蔵されたものの理解などはとても出来ない。その為誤解や、正当な批評をなし得なかった部分が多いと思う。著者の御容赦を心からお願ひする次第である。

昭和五十二年五月 文言社発行  
三百五十五頁